

『新鳥取県史通史編・現代1』の編さんの柱について

令和8年3月
鳥取県史編さん会議

鳥取県史「通史編（現代）」の調査編集にあたっては、鳥取県史編さん方針（令和 7 年 2 月 11 日制定）に基づき、各編に共通する問題意識を次のとおり整理し、政治・経済・社会・文化の各分野に共通する柱として執筆を進める。

1 人々の声

かれもら」。生に行政がまとす。土地
行影響ど「指所土
ば実影と、目他の
れがなにてをてこ
す策ん価げ述べ、
も政ど評上叙離等
とる、なり史を々
く、あめ取歴県人
多ばけ客声で。来る。
がえ受のの点いらす
と例に事生観なか映
こ、う来なうら外反
るはよ出様い限国に
れでの。多とに・体
か史どの」々外全
描県がた々る人県史
に本々き人える、県
点を。人いど考す々
重たをでな、「住人け、
をっ策ん一」、居た傾
策あ政込りる「内にきを
施でのりト「見にきを
政ちそ取ス「県つに
行が、をヒか現在声
、りや点ルり現がの
はなき視ラがはた々
史に動いうなとれ人
体列のいオつ」離な
治羅々と・の々度ま
自の人か記ら人一ざ
の事たの手れ「、ま
で来たった・そう々さ
ま出した新聞、い人た
れたいさ新活でるっ
こ見なら、生こすわ
らるたずやこ活関

2 民主化の歩み

に基民透の況をて浸自
な産通会県
う次を社本
よ一後域た
じ第戦地え
同め。でま
国じた形踏
全はつなを
にをかうど
律業高よな
一農もの果
はは度ど成
「主のの念の
民でへ理書
「主園の告
たば市法報
し半都憲動
指代大國活
目をの本部行
をを方日政を
み1950方軍述
組地にしと地記
のの特指権Qし
社会目人H目
社いを・G注
なな興義。に
たは復主かみ
新で業和の組
のけ産平たり
後わた・っ取
戦たし義いや
敗つと主て況

あ盤主し状

3 周辺性と偏り

開は活げらのし
域政生じた源識
地行民やも資意
た発県動を的を
れ開と運向化」
らる展藝指文り
めす発民の、偏
進後済にへ差「
に前経々流格と
心を、人交済」
中期げのの経辺
を長掲域との周
側成を地域だ「
洋済」の地のい
平経破こ岸あ化
太度打、対の文
は、高のは海と・
県が進性」本地的
本た後辺、山経
るき「周し中・
あても「促と的
でれ県たを部理
県さ本し動市地
少残、う活都。
最りしそな、た
口取榜方的とれ
人く標一立るさ
き、を展だ。自け指
し大展だ。・向目
置ら発ん的をが
位かの組発目を
に長土り内に克
側成国取ど内の
海済るにな県ど
本経あ上し。な述
日や衡向こたり記
発均のおし偏た

4 「ふるさと」との葛藤

明治時代に国民国家が創設される過程で仮構的に作られた「ふるさと（故郷）」の概念は、生まれ育った地域を指すことばとして広まった。戦後、復員者や引き揚げ者が戻り、「ふるさとはどこか」という問いかけが、戦後の社会情勢に編み込まれた。戦直後の疲弊した本場でも、戦後の復興期には、ふるさとを再構築する意欲が高まり、ふるさとづくりが盛んになった。この間、ふるさとづくりは、単なる生活環境の整備にとどまらず、文化・教育・産業・観光など多岐にわたる分野で展開された。この間、ふるさとづくりは、単なる生活環境の整備にとどまらず、文化・教育・産業・観光など多岐にわたる分野で展開された。

5 女性

、まがに、と
イ、性時どこ
テけ女、なる
ニ受てり量れ
ユをしな費ら
ミ響とと消げ
コ影員手の上
も議いウリ
域最会担ル取
地に議の一来
で、容県会レ従
で変や社力。
かの員域やる
な観議地率あ
く値会て及で
い価国し普色
てやらおの特う
し会かと車の行
化社ぐを動県を
変たす育自本述
がし後教軽は記
観う戦会。さた
値こ。社つ高て
価。うの立のあ
くたろどに標を
きつあな頭指光
大いで級先るに
てて性学のす動
けし女人動映活
か容は婦運反の
に変のは会を性
代くた後社さ女
現きえのど多た
ら大与そなのつ
かもを、発性か
後等響し原女な
戦族影躍反く少
家た活は働が